

6年 私の「大事件」

和歌山県 和歌山大学教育学部附属小学校 大西 弘美
指導者 山中 昭岳

5年生の2学期、去年の10月2日、私の身に「大事件」が起きました。生まれて初めて救急車で運ばれてしまったのです。

それは、ほんの一瞬の出来事でした。その日の昼休みは、間近に控えたシンクロマットの練習のため、私は友達や先生と体育館にいました。「難しい技だけど、やってみたい！」とずっと思っていたバック転に挑戦するためです。授業の中では練習できないので、希望者だけでの練習でした。

「よーし！やるぞ！」と深呼吸して、後ろ向きになり、跳びあがると、赤い色のロイター板で勢いよく踏み切りました。頭の中のイメージでは「ぼふっ」と柔かいセーフティーマットに体ごと着地する自分の姿や感覚があったのに、次の瞬間私が感じたのは何とも言えない硬い感触と、どこから始まっているのか分からない様なすごい痛みでした。私は、どんな格好か分からなかったけど、体育館の天井の灰色の鉄骨を見上げていました。一瞬全部が止まったように静かになって、声も出ません。左の肩のすぐ横にはロイター板の横の面がかすかに見えて、右の方にはマットの緑色が見えた事を覚えています。すぐに先生が走って来てくれて、ロイター板とマットの間に落ちた私を助けてくれました。何か言おうとするのですが、息が吸えなくて何も言えません。怖くて苦しくておなかの中が「シュー」っと冷たくなりました。周りで友達の「大丈夫？」「どうしたん！」と言う声が聞こえてきました。保健の先生も来てくれて、「心配やから救急車呼びますか。」と言っています。

「どうしよう、どうしよう。」心臓がバクバクしてきて涙が出そうになったけど、なんだか「泣いたらあかん。」と思って我慢しました。そのうち「ピーポーピーポー」という救急車の音がすごく大きくなりピタッと止まると同時に救急隊の人がバタバタと入ってきて毛布ごと「1・2・3」の掛け声でストレッチャーに乗せられました。救急車に運ばれる途中に、あおむけにねかされて見えた校庭の木や空が妙に青々としてきれいに見えて「私どうなるんやろう、このまま死んでしまうのかな。」とまた不安でいっぱいになりました。それから後は、あまり覚えていません。病院につくとそのまま「ICU」という部屋に運ばれました。そこには、お医者さんが何人もいて、見た事もない機械がいっぱいあって心細くて怖くなりました。看護師さんが病院の浴衣みたいな白い服に着替えさせてくれて、かみの毛を結んでいたゴムやピンどめも全部はずされてしまいました。指に

クリップみたいなのをつけられたり血をとられたり点滴をされたりと次から次へといろいろな事をされました。その頃には、ちょっとだけ落ち着いて気がつくとも息も普通に出来る様になっていました。若い男の先生が近くに来て「大変やったなあ。」と言ってくれましたが、いつもの様に笑ったり答えたり出来ませんでした。ちょうどその時「ウィーン」とICUのドアが開く音がして、お母さんが仕事場から駆け付けてくれました。すぐにベットの横に駆け寄って、膝をついて私の体を抱きしめてくれて「痛かったな、しんどかったな。もう大丈夫やで。」と言ってくれました。私は急にホッとして、我慢していた涙がぼろぼろあふれてきて止まらなくなりました。お母さんも泣いていて「生きててくれて良かったよ。」と何度も言って私の涙を拭いて顔や頭をなでてくれました。それを聞くと一気に怖さや心細さが消えて、すごくすごくうれしくて初めて「こわかった…」と声が出ました。お母さんがまた抱きしめてくれました。しばらく検査が続きましたが結果は心配していた「頸椎損傷」はなく左手の中指の捻挫だけで済みました。「本当に良かったねえ。奇跡やで！」とお医者さんや看護師さんが口々に言ってくれました。夕方には、家に帰れる事になりました。その時初めて上靴も運動靴もはかずに裸足で運ばれてきた事を思い出して、お母さんに「靴、ないで。」と小声で言いました。それを聞いた看護師さんが「病院のスリッパを使ってくれて良いですよ。」と言ってくれましたが、お母さんは「おんぶしていきます。」と答えました。病院の玄関でお母さんにおんぶしてもらって駐車場まで行きました。なんだか恥ずかしいような嬉しいような気持ちがして、落ちない様にギュッとお母さんの肩に顔を押しつけました。学校へ靴を取りに戻って、そのままクラスのみんなや先生に報告に行くと「よかったよ！よかったよ！」と言ってすごく喜んでくれました。先生の目に涙が溜まっていて「本当に心配かけたんやな。」と胸の中がキューンと痛くなりました。家に帰ってから旅行中のおじいちゃん、おばあちゃんから電話があり「命がちぢまったよ！ぶじで良かった！」と何度も言っていました。お父さんは仕事から戻ってすぐ玄関で「大丈夫やったか！」と大きな声で言ってくれました。

今回の大事件は苦しかったし、痛かったし、怖かったけど、いろいろな事に気付きました。お母さんや先生やみんなにいっぱい心配してもらって「私ってほんまに大事に思われていたんやな…」と言う事が今回の大事件でわかったのです。それが今、思いかえしても、なんだかうれしくてたまりません。そして、「生きてるって、あたりまえじゃない。」って事がわかりました。「人間はほんの少しの事で死んでしまうんだ。」と言う事を実感したからです。この大事件の後上手くは言えないけれど私はちょっと

「変化」したと思います。あたりまえの事かもしれないけどあらためて「私は絶対に自分の命が終わる最後の最後まで力いっぱい一生けん命生きよう。」と思うようになりました。命がなくなるかもしれないと言う事は、こんなに怖くて痛くて悲しいものなんだと言う事、そして何よりも私の命をこんなに大切に思ってくれる人達がいるって言う事がわかったからです。今までも本を読んだり教えてもらったりして、そう言う事はわかっているつもりでしたが今回その事が体でわかって、心にまっすぐ届いてきた気がしました。これまで、この大事件の事は思い出すのも怖くて、いやで作文にする事なんて考えてもいませんでした。でも最近こんな風に気付いたり、わかったりした事を「ちゃんと書いてのこしておこうかな。」と思う気持ちがわいてきました。それはきっと私にとって、この痛くて怖かった大事件が自分の心を変化させてくれた、もう一つの大事件だったと思える様になったからだと思います。